

体験談

派遣先

アメリカ

米国禅センター落穂拾い

第二回生 河内 義宣

(静岡県釣学院東堂)

アメリカ・ゼン・センターに行かせていただき既に三十年、帰国後すぐに任職を拝命し、平成二十六年に退任して今は現任職の補佐をしていますですが果してアメリカでの体験がどれだけの事であったか、かえりみるとはなはだ慙愧にたえないところです。

二、三、思い出すことなどお話してお許しいただきたいと思えます。その第一に感じたのはアメリカにおける様子は、中国における初期禅宗史のようなものではないかということでした。葬式年忌儀式法要は二の次、三の次でゼン・センターに集まってくるメンバーの関心は、仏道とは何か、さとりとは何か、それ以外にはありません。ある時、メンバーとの会話の中で「十牛図」の話になったことがあります。「ところで、あなたはどのステージにいますのですか。」とたずねられた私は、「よく言って足跡を見つけてその後をおいかけているようなものです。」と答えました。すると彼は、「なんだ、日本から来た坊さんがそんな事か」と軽侮の眼をして

私を見たことでした。学解はどこまでかさねても分別に分別をかさねるのみで、無分別智にはなりません。学解をふりまわしても学道、修行にはならないということをよくよく知っておかねばならないでしょう。

またある時、一人の婦人が（もとはキリスト教か、ユダヤ教の人であったと思います。）話し合いの中で四弘誓願文をとりあげて「仏教はすごいことを言う、この間違いだらけ、迷いだらけの限られた自己が、どうして衆生無辺誓願度：等と言えるのだ。」と発言されたことがありました。四弘誓願文は菩薩の通願といわれ菩薩様方はそのような尊い誓願をもっておられるから、私達もその誓願を自己のものとしていただけると、よくお唱えいたしますが、文章上は主語になるものがありません。ところが英訳されたものは

Sentient beings (creations)

are numberless I vow to save them

となっております。主語が菩薩では誓いが他人事となっております。英訳は *I vow*、私は誓うとなっております。そうであれば真剣に誓願文に対峙せざるを得ません。もつとも、主語がなくとも唱えるのは自分ですから真剣に対峙しなければならぬのは言うまでもありません。かつて青年僧の集まりで何の勉強もしないで法門無量誓願学と唱えていたらまるつきりウソを

言っていることになりはしないだろうかとお話をさせていただいたことがありました。

最後に施餓鬼のお経『甘露門』について、ニューヨーク・ゼン・センターのグラスマン徹玄老師はこのお経に深い関心を持たれ、本来ダラニは翻訳しない、できないものとしてそのまま施餓鬼法要に受用されてきたわけですが、老師はあえて翻訳してそれを日本のお経とミックスした形で活用されるようになり、いろいろ試行錯誤しながら施餓鬼の儀式を整えられました。（翻訳全文は『成寿』第十巻に報告させていただきました。）その過程で会員との話の中で次のような会話がありました。

会員「ガキ (hungry ghost) とは何ですか?」

老師「私達がガキなのです。」

会員「授菩薩三麻耶戒陀羅尼 (Dharani of Giving the Bodhisattva Samadhi Precepts) オン サン マヤ サトバン (I am the Buddhas they are me.)。私は諸仏であり、諸仏は私である」となっています。概念的には理解できるように思いますが、それを唱えることには抵抗があります。…」

老師「そうであつてもしつかり唱えなければいけません。」

道元禪師は「自己をはこびて万法を修証するを迷いとす」（現成公案）といわれ、また随聞記には「光明を放ち法を説いて衆生に利益を与える徳のある釈迦や弥陀などを仏と知つていて

も、指導者がもし『仏と言うのは、ヒキガエルやネズミである』と言ったら、それらを仏と信じて、それまでの知識や理解を捨てるべきである」とのお示しがありますが、現代に生きる私達は、自分の考え、物差しをもって仏法を忖度していることが多いと思いますが、大いに反省を要することであると思います。

